

サタデースイマー

千葉県 縣 鶴之介

知的障害のある息子のケンが「イチハラ」と呼ぶ、「ミミスイミングクラブ市原」に通い始めて十八年になる。毎週土曜日の午前中は、九十九里浜南端の自宅から房総半島を横断して市原市の八幡宿まで、ちよつとしたドライブだ。「ミミスイミングクラブ」は、1964年東京オリンピックの競泳代表選手だった故木原光知子さんが創立した。ケンに泳ぎを教えてくれたのは、ベテラン女性コーチのSさんだった。品川校で障害児のための「特別クラス」を受け持っていた。とにかく声が大きくて目力が強く、年齢を感じさせない。子どもたちを指導する声がプールに響き、ガラスで隔てられた観覧席まで熱気が伝わってきた。常に真剣勝負で、ふざけていると叱るが、上手にできた時は、うれしそうに観覧席の親たちを見た。暖かさにつられ、ついつい居眠りをしてそれを見逃すと、「なんでお父さん、見てなかったの！」と後で怒られた。

ケンは二歳半になっても言葉を発することがなく、家の中で延々とアンパンマンのビデオを見たり、ポケモンの指人形を並べたりしていた。おとなしいかというところでもなく、近所にあつた広い公園の中を走り回り、追いかける妻をくたくたにした。

その夏の北海道旅行で、初めてケンを飛行機に乗せた。滑走路

に向けて動き出した時、ケンはパニックを起こした。激しく泣き叫ぶのを見かねたキャビンアテンダントのお姉さんが、優しく声をかけながらおもちゃを手渡そうとしてくれたが、その手を強く払い除けた。ケンは妻の膝の上から通路に脱走を試みようと思ひ出した。そのうち離陸の態勢に入ると、お姉さんは悲しそうな表情を浮かべながら乗務員用の座席に戻り、シートベルトを締めた。旅から帰つてすぐに、当時住んでいた千葉市の療育センターを受診した結果、ケンは自閉傾向のある知的障害と判定された。

ケンが特別支援学校の小学部に入學する年に、九十九里浜の南端に引越した。田舎の戸建てでのびのびと暮らす方が、多動のケンには向いていると思つたからだ。引越して一年が過ぎた頃、千葉市の児童発達支援施設でケンと同じクラスだったT君のお母さんに、水泳をやってみないかと誘われた。

施設で隣のクラスだったE君のお兄ちゃんが通う市原のミミスイミングクラブに、障害児のための「特別クラス」ができたという。いつもお母さんと観覧席にいたE君に知的障害があることを知つたコーチが、品川校のSコーチに交渉してくれたらしい。

毎週土曜日の午前中に車で一時間近くかけて市原に通うことになるが、T君のお母さんの誘いを断る理由はなかった。ケンにとつて良い刺激になると思えた。土曜日の午後は、千葉市内にある知的障害児のための学習教室にケンを通わせていた。夕方には、引越す前から長女が通つていた千葉市内のスイミングスクールに移動するから、子どもたちの付き添いで土曜日が終わる。

男の子はケンのほかにE君とT君、女の子はAちゃんとMちゃんというメンバーだった。みな我が道を行くタイプで、プールにじっと入っていることはなく、隙あらば代わる代わる脱走した。プールサイドを走り回る子もいれば、ジャグジーに入ってしまう子もいる。ケンもジャグジーがお気に入り、湧き上がる泡と戯れてはプールに呼び戻されるのを繰り返した。知的障害のある子どもたちに、家族とレジャーで訪れるウォーターパークとの違いなど分からなかった。親たちは、はらはらしながら観覧席で見ている。

Sコーチはそれも計算済みなのか、慌てず堂々としていた。子どもたち一人ひとりの性格を完璧に把握したようで、その子に合わせた叱り方を心得ていた。声が大きくて目力があるけれど、こういう子たちが好きでたまらない、というのが親たちにも伝わってくる。だから、この人に任せよう、と思えた。

その日のレッスンは終わると、Sコーチは親たち一人ひとりに子どもの様子を面白おかしく話してくれた。親たちはそれを笑いながら聞いた。元々、水が好きだったこともあり、「初めてのことに對する不安が強いケンでもすぐに馴染めた。怒られながらも楽しそうにしている、土曜日が近づくと、「イチハラいくひと?」とか、「イチハラいくよ」と確認を求めたまでになった。行動パターン化しがちなケンの土曜日のスケジュールに、「イチハラ」がしっかりと組み込まれた。忙しくなくプールとジャグジーを行き来して疲れ切ってしまうのか、午後の学習教室で居眠りをしてしまい、連絡帳に「船を漕いでいました」と書かれたのには参った

が。

「ミスイミングクラブを創立した木原さんの、「明るく・楽しく・ゆつくり」という Motto のうち、少なくとも「ゆつくり」という点では、ケンたちは優等生と言って良かった。マイペースにもほどもある、と思ってしまうが、Sコーチはその子の気持ちに乗っている時に集中的に教え、気持ちに乗っていないとみると、無理に教えようとはしない。

木原さんは、「障害をもつ方たちにも水泳の楽しさを教えていきたいと思う。いや、「教える」というより、彼らと交流するなかで、私たち指導者のほうが学ぶことも多い」と著書に記している。Sコーチは、障害を個性や性格と捉えていた気がする。障害の有無など関係なく、一人の人間として向き合っていたのだろう。身体的な特徴もすっかり見えていて、ケンの足を見ながら、「こういうベタつとした足は平泳ぎに向いているよ」と言った。

Sコーチは、ケンのお腹にヘルパーの浮きを巻きつけ、平泳ぎの手と足の動きをそれぞれ教えた。いつの間にかケンは脱走しなくなり、おとなしく浮かんでいた。それでも、ゴーグルの中の目は、隙あらばサボってやろう、と常に機会を窺^{うかが}っているらしく、時々、Sコーチに怒られていた。それがケンらしいと言えばケンらしいのだが。

ケンたちがレッスンを受けているレーンの奥のレーンでは、高齢者クラスのおばあちゃんたちが、思い思いの泳法で泳いでいる。加齢で関節が硬くなってしまうか、背泳ぎなのに平泳ぎの逆のような手の動きで水をかきながら進む人もいる。ゆつくりと、

ゆつくりと。25メートルを往復して戻ると、孫を見るような穏やかなまなざしでケンたちを見ていた。そのさらに奥のレーンでは、マスターズの大会に出場するような男女が、完成された泳ぎから華麗なクイックターンを繰り返す。そして、ケンたちのレッスンが終わりに近づく頃には、幼児クラスの子たちがお母さんと元気に観覧席に入ってくる。年齢や性別、障害の有無に関係なく、それぞれが目標を持ち、同じ水の中にいる。みんな等しく土曜日に集まる、「サタデースイマー」だ。それは、木原さんが思い描いた姿そのものではないだろうか。

「エー ビー！ てー あしー！」

Sコーチの大きなかけ声が、ガラス越しに観客席まで聞こえてくる。特別支援学校の中学部に通うケンは、平泳ぎが泳げるようになっていた。お腹にヘルパーの浮きはもうない。Sコーチは、「ほらね。泳げるようになったでしょ！」と笑顔で言ったが、こんな日が来ることを想像できなかった。Sコーチは、知的障害のあるケンのために教え方を工夫しながら、粘り強く向き合ってきた。手と足の動きがきれいで、息継ぎも効率よくできている。それでもSコーチは妥協しない。相変わらずケンは、隙あらばサボろうとしているのを見透かされ、「ケン！」と怒られていた。

プールで泳ぐメンバーは、六年の歳月の流れの中で変わった。ケンが水泳を始めるきっかけを作ってくれたE君とMちゃんが辞めてしまったのは残念だった。男の子も女の子も人数が増え、肢体不自由の子も新しくメンバーに加わったが、相変わらずSコー

チは鋭い観察眼でその子の性格と身体的な特徴をすぐに把握し、最適な練習メニューを用意した。

障害のある子たちの指導を自ら望んだという女性のYコーチが、Sコーチの補助に付くようになった。優しさが顔ににじみでているせいかな、なかなか子どもたちが言うことを聞いてくれない。この人は怒らない、と思われている気がした。見かねたSコーチがアドバイスするのを、Yコーチはしっかりと心の中でメモをとるように聞いていた。木原さんの、「私たち指導者のほうが学ぶことも多い」というのを肌で感じたか、それとも、一筋縄ではないかな、と思っただろうか。いつもSコーチの声だけがプールに響いていた。

土曜日の午後からケンが通っていた学習教室と、夕方に長女が通っていたスイミングスクールを辞めたから、土曜日の習い事は「イチハラ」だけになった。マイペースな子どもたちと真剣勝負のSコーチのやり取りを、観客席でお母さんたちと笑いながら見るのが週に一度の楽しみになっていた。里山の風景が残る市原市の永吉や金剛地こんごうちを抜ける帰り道も、すっかり私のお気に入りになった。所々でふじの花が咲く新緑の山道。田んぼに水が引かれて田植えが始まる頃、車の窓を開けると聞こえてくる蛙の鳴き声。そんな、生命エネルギーのようなものが満ちあふれる季節が特に好きだ。NHKの「みんなのうた」に強いこだわりを持つケンは、ラジオが始まる時間が近づくと、後部座席で「ラジオだいにほうそう」と騒ぎだす。山道で電波が入りにくくなると、聴くことができな理由を説明するのが大変だ。

「平泳ぎでケンを大会に出すから」

S コーチは、東京都障害者総合スポーツセンターで開催される東京都の障害者スポーツ大会に、ケンを出場させるつもりらしい。嬉しいと思う反面、初めての場所が苦手なケンには大会など無理ではないか、という思いが強かった。ケンがスターターピストルの音に反応して泳ぎ出し、ゴールする姿が全く想像できない。それは、出場を告げられたほかのメンバーの親たちも同じだった。みな口々に、「大丈夫かなあ」と言っていた。

大会当日の日曜日は、五月晴れのいい天気だった。ケンと私は、外房線の各駅停車に朝食用のパンを持ち込んだ。二時間近く電車に揺られるのは、電車オタクでもないケンには退屈だったかもしれない。

会場に着くとすぐに、「ウォーミングアップが始まるから水着に着替えてください」とY コーチに言われた。競技開始前の招集場になっている体育館は、選手と付き添いの保護者やコーチたちの控え室を兼ねていた。東京じゅうのスイミングクラブに通う子たちが集まっているようで熱気に包まれていた。

ウォーミングアップを終えたケンがおとなしくしているわけがなく、独り言を言いながら体育館の中をうろろうし始めた。ケンが出場する25メートル平泳ぎの開始まで時間があつたから、会場周辺を散策することにした。

新緑がまぶしい公園の遊歩道をのんびり歩いていると、突然、携帯電話が鳴った。

「今、どこにいますか？ もうすぐ招集が始まりますから戻って

きてください！」

慌てぶりが伝わってくるY コーチの声だった。ケンを走らせ、急いで体育館に戻った。

「すみません。ケンを落ち着かせるために、ちょっと走らせていました……」

いつもの穏やかさが影を潜め、アスリートのコーチらしい目になつているY コーチとまともに視線を合わせられなかった。

しばらくして、「男子25メートル平泳ぎ」の招集が始まると、ケンは役員に指示された場所におとなしく座った。競技が進行していくに連れ、並べられた椅子を一つずつ前に移動していく。隣

には品川校の子が座っていた。ケンはちゃんと泳げるのだろうか。私は後ろ髪を引かれながら、ひと足先にプールに移動した。

ケンが入場してきた。私の心配をよそに、落ち着き払っているように見えた。スタート台の後ろに置かれた椅子に座って順番を

待つあいだ、左足を右の太ももの上に載せ、右手でポキポキと足の指を鳴らすいつものクセが出ていた。

「ピッピッピッピッ、ピー」

まだ飛び込みができないケンは、プールの中からのスタートだったが、スターターの吹く笛の音が響いても、プールに入ろうとしなかった。Y コーチが慌てて促し、ようやく笛の音の意味を理解したようだった。静止していたプールの水面は、ケンが入ったところだけ動いた。

静寂を破るような、「Take yourmarks」の音声は一気に緊張感を高める。続いてスターターピストルの電子音が鳴ったがケン

は反応せず、左右のレーンの選手が泳ぎ始めてから慌ててスタートした。

「ケンーン！」

気がつくど私は、自分でも驚くほどの大声で叫んでいた。ケンは、Yコーチの「エー ビー！」というかけ声に合わせて手足を動かし、左右に水をかき分けながら、私が待つゴールに向かってまっすぐに進んでくる。他の選手を応援する親たちの声など耳に入らなかった。競技スイマー・ケンの最初の一步に過ぎないだろうが、大きな一步になる気がした。

「バンザイー！ バンザイー！」

ケンは首に銀メダルをかけてもらったあと、年配の男性役員に言われるまま、他の入賞者と一緒に何度も両手を上げさせられた。それがこの大会の表彰式での恒例らしかった。ケンは戸惑った様子で、銀メダルを獲得したことなどどうでも良くて、早くご褒美のラーメンを食べさせろ、という顔をしていた。

それからケンは、横浜国際プールや習志野国際水泳場で毎年開催される全国大会に出場するようになった。競技開始までの待ち時間に行く図書館や書店、競技終了後のラーメン屋さんが目立ったと言えなくもない。大会会場で「JAPAN」と書かれたジャージを着ている選手を見て、いつかケンも、と淡い期待を寄せた。しかし、小柄で痩せっぽちなケンとオリンピック代表選手のような体型の彼らとの差は歴然としていた。

いつの間にかプールにYコーチの声が響くようになっていた。

障害のある子どもたちとの向き合い方を、しっかりとSコーチから受け継いだようだった。

特別支援学校を卒業したケンは、障害者就労支援施設で働いた。施設で農作業をしているが、運動不足は否めない。そんなケンにとって、週に一度の「イチハラ」は貴重な運動の時間だ。T君も辞めてしまい、入会当初から一緒なのはAちゃんだけになった。メンバーはみな、「障害児」というより「障害者」の年齢になり、ジャグジーに入る姿が、温泉旅行で露天風呂に漬かる同僚のように見えた。

Yコーチが転勤したあと、Sコーチは若い男性のFコーチを育ててから市原を去った。Sコーチの大きな声がプールから消え、ぽっかりと穴があいたような寂しさに包まれた。Sコーチが子どもたち、そして親たちに残してくれたものは大きい。初めの一步がどんなに小さくても、いつか必ず目的地に辿り着けることを教えてくれた。ケンにとっての目的地は、木原さんがモットーとした、「明るく・楽しく・ゆっくりと」泳ぐことだろう。

コロナ禍で半年近く通わない時期もあったが、週に一度の「イチハラ」は、ケンだけではなく、私にとっても欠かせない「パターン」であり、良い気分転換になっている。Sコーチ仕込みの平泳ぎを手に入れた、「サタデースイマー」のケンを羨ましく思うが。